

「靈的戦いの基礎」

レビ記 19 : 1 ~ 18

ローマ 13 : 8 ~ 14

遠藤 一則 牧師

キャンプに行ってきました。雨上がりということもあり、普段泳いでいた川はかなりの流量で、入るのもためられました。以前も同じような状況があり、私の覚えている範囲で3人、おぼれかけた人を助けた経験があったからです。最近よく聞く水の事故のニュースもあり、非常に危険という予感が働きました。そこで木切れを流れの速いところに投げ込んでみましたが、いつまでもあがってきません。さらにやばいなという予感が働きました。そこで自分も飛び込んでみたところ、水が冷たく、心臓あたりが縮むような感触、足がけいれんするような兆候もあり、向こう岸に行かずに引き返してきました。やはり、何か思い切ったことをするときにはよく観察し、正しい決断をする必要がある、と感じた次第です。

わたしたちは今、毎日ある程度決まった生活を送っています。仕事や勉強をし、食べ、眠り、たまに遊びに行く。時には大きな問題、時には楽しい出来事、そういったもので人生は彩られていくのです。たいていはそれで人生が終わるのですが、違うことを体験する人々がいます。自分には何の得にもならないのに、社会や政治、人々の暮らしに関心や問題意識を持ってそれを変えようとする人たちです。イエスはそういう人でした。だから、私たちは彼を信じ、救われるに至ったのです。そして、イエスはこのわたしたちにもおなじように生きなさい、とお命じになりました。つまり、宣教の働き、そして靈的な活動の場に招かれたのです。好むと好まざるとに関わらず、私たちは靈的戦いの中に召されているのです。しかし、それは肉の戦いではありませんから、違った視点が必要です。今日はその基礎を考えることとしましょう。

影響力ある人になるために、どんな社会でもそこで受け入れられる規範、つまり「まともな人」のタイプというのがあると思われまます。ユダヤ人の場合はレビ記の19章です。ここにはユダヤ人の社会にあるまともな生活が出てきます。母父を敬え、安息日を守れ、偶像を拝むな・作るな、いけにえをささげよ・三日目になる前にその肉を食べよ、収穫をとりきるな、盗むな、欺くな、雇人の賃金をごまかすな、障害者に気を配れ、親戚を大切にしろ、復讐するな等々、事細かな規定が設けられました。これはユダヤ人がその社会で発言権を得るために最低限、必要な行為でした。そういうまともな人が社会を動かす権限があると思われていたのです。この意味では私たち日本人はユダヤ人社会においては、認められない人間、まともではない人間になってしまうと思います。

それに対して、ローマ人をはじめとする異邦人、すなわち、我々の場合はどうでしょうか。だいぶ簡略化されています。ローマ13章によれば、ローマ皇帝に従え、税金を払え、この二つです。現代風に言えば、日本の法律を守れ、税金を払え、でしょうか。今の日本ではこの二つをやっていれば、一応はまともな社会人として認められます。ユダヤ人たちと比べれば、非常にゆるやかなものですね。それでも、地域社会や職場では、そのような範囲を越えたルールや付き合いがあり、もっと細かいことが求められます。日本はこの点においてはかなり規定の厳しい国に入るかもしれません。

しかし、主は上の二つをさらに簡略化すると共に、鋭く深めた命令を残しました。「レビ記」にも「ローマ書」にも出てくる「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」です。これをしてはじめて主の前にまともであり、この言葉はどんな共同体にも歓迎される真理だと思います。しかし同時に、これこそ霊的な戦いの最良の武器になるのではないのでしょうか。愛というのは人の理性に働きかけることもありますが、人格と人格の関係に入り込んでくるものだからです。人の価値観とは人格と一緒にあってその人の中につくりあげられます。例えば、自分を愛してくれたおじいちゃん、優しくしてくれたおばさん、助けてくれた友人といった人たちが持つ価値観は、何とも懐かしい思い出と一緒に心に残ります。私の場合は近所のおばあさんでした。私の親が私を叱って罰を与えたときに、よくそのおばあさんがかばってくれたのでした。彼女は交通事故の後遺症で片足がありませんでしたが、幼稚園児の私を時々近くの神社に連れて行って遊んでくれました。ですから、私にとって神社は楽しい思い出の場所で、おばあさんのまねをして普通に拝んでいたのです。

その後イエスを信じて、神社参拝をやめるときに、おばあさんとの良い思い出も捨てなければならないという痛みを感じました。人格と結びついた痛みですね。ただ偶像礼拝とその人の人格とは別物です。自分を愛してくれた人とのよい思い出を残したまま、イエスに従うことは可能なんですね。失うものは偶像礼拝という行為だけであり、よき思い出を封じ込めてしまう必要はないわけです。

悪魔は人の愛を求める心を利用して偽りを教えてきます。しかし、主は愛と共に真理を知らせるのです。霊的戦いには祈り、実生活、みことば、さまざまな要素がありますが、土台はこの「愛と共に真理を示す」ことにあると思うのです。なぜなら、福音の真髄は十字架にあり、十字架は主の愛の象徴だからです。私たちはイエスの愛という人格と十字架の義という価値観を一緒に受け入れたのです。

そして今や主は人間を通して福音を示そうとされました。ただ人間は不完全です、というよりも罪があるので、愛という人格の面も、義という生き方の面も十分表すことはできません。そこで主は同じローマ 13 章からパウロを通してこう語りました。「主イエス・キリストを着なさい。」主イエスはわたしたちにご自分を着てほしいのです。主イエスはわたしたちのために完全な愛と義の衣を完成したくださり、聖霊によってすでに私たちに着せてくださったのです。今や私たちはそれを信じ、認めることで主を着ることができるのです。そのときには主があなたの隣人を愛し、導くことになります。それもあなたと一緒に、です。なんという恵みでしょうか。

最後にこの主の愛と霊的戦いを、謎かけで表現しましょう。

「究極の律法」とかけて

「隣人を自分と同じように愛すること」と説く。

その心は

「あなたの隣人を私も一緒に愛するよ、イエスが先頭きって行く。わたしは後についているだけ。」